

会計と物理と漢詩

——井尻雄士先生古稀記念——

井尻雄士・斎藤静樹・石川純治

目次

〈はじめに〉

井尻雄士先生の古稀をお祝いして（明治学院大学教授／東京大学名誉教授・斎藤静樹）

会計と物理と漢詩の優雅（カーネギーメロン大学教授・井尻雄士）

科学としての会計（駒澤大学教授・石川純治）

〈あとがき〉

〈はじめに〉

今年2005年、カーネギーメロン大学の井尻雄士先生が古稀をむかえられた。1959年（昭和34年）に渡米されて、およそ45年の間、アメリカの地で研究・教育に携わってこられた。この間、周知のとおり、1982年にはアメリカ会計学会会長、1989年に会計殿堂入りなど、輝かしい足跡を残してこられた。

駒澤大学では、井尻先生が毎年ご帰国される6月、少人数有志での「井尻先生を囲む会」を開いてきたが、今年の3回目がちょうど井尻先生の古稀の年にあたった。そこで、井尻先生の古稀を祝う記念レクチャーおよび記念パーティーを企画した。幸い先生からは派手にならなければという条件で了解を得ることができ、関西や九州の先生方も交えて6月26日（日）お祝い会が催された。

その後、お祝い会に参加できなかった先生方から講演内容をいただきたいとのご要望がよせられた。そこで、その後井尻先生から頂戴した原稿「会計と物理と漢詩の優雅」を「古稀を祝う会」世話人の斎藤・石川の祝いの挨拶を添えてここに掲載することにした。古稀記念の1つになれば幸いである。

井尻雄士先生の古稀をお祝いして

斎藤静樹（明治学院大学教授／東京大学名誉教授）

井尻雄士先生は、本年、めでたく満70歳をお迎えになられます。本日は、先生が一時帰国された折に合わせて、先生からご指導やご厚誼を賜った方々にご参加いただき、先生のお話を拝聴するとともに、ささやかな古稀のお祝いを催すことになりました。できるだけ簡素にというのが先生のご希望であり、そのご意向に沿って、実際の企画や準備はすべて石川先生が小栗先生のご協力を得て進めてくださいました。私は時々お手伝いしただけですが、僭越ながら石川先生に代わってごく手短かに井尻先生のご功績を振り返り、ご挨拶をさせていただきます。ことからの性質上、私の個人的な記憶をたどることをお許しください。

ご承知のように井尻先生は、記録的な若さで公認会計士の第3次試験に合格されたあと、渡米して1963年にカーネギーメロン大学で博士号を取得され、スタンフォード大学の助教授、準教授を経て1967年にカーネギーの教授に迎えられました。ご経歴を拝見しておりますと、アメリカの一流大学で博士課程も助教授も準教授もすべて2年ずつで「卒業」するという、信じられないようなスピードで階段を駆け上がったご精進の跡がうかがえます。私はその時代の先生を存じ上げませんが、後年、ハーバード大学で勉強した折に、先生の恩師であったクーパー先生から何度も当時のご様子をうかがいました。クーパー先生の私に対するお小言は、いつも「Yuji はこうだった」というものでした。

その間、先生は多くの学術誌に次々と論文を発表して斯界の耳目を集める傍ら、博士論文をもとに書かれた *Management Goals and Accounting for Control* (North-Holland, 1965; 『計数管理の基礎』, 岩波書店), ならびに *The Foundations of Accounting Measurement* (Prentice-Hall, 1967; 『会計測定の基礎』, 東洋経済新報社) の2冊の研究書を刊行され、パラダイム改革の夜明けを迎え

ようとしていた会計研究において、新しい時代の旗手として確固たる地位を確立されました。詳しくお話する余裕はありませんが、その点は、2冊目の書物に付されたサブタイトル *A Mathematical, Economic, and Behavioral Inquiry* からもうかがうことができるかと思います。文字どおり、数学や経済学、それに行動科学の概念や成果を駆使して、会計の測定機能を根源から問い直そうとすご研究でした。

当時のアメリカでは、むしろ会計の開示機能に目を転じて、情報利用者の意思決定へのインパクトで情報の価値を分析する研究が台頭しつつありました。もっとも、証券市場に関するミクロの経済理論の成果を活用した実証的な株価研究は本格的な発展の前夜であり、さしあたり情報価値ないし期待ペイオフの具体的な指標を共有しない抽象的なモデル分析が中心でした。その一方で、測定面の研究は、60年代初頭からの理論的な基礎概念の再構築が、会計基準の改革と歩調を合わせられないまま停滞を余儀なくされておりました。そうした状況下でアメリカ会計学会の1966年ステートメントは、情報をキーワードとする新たなパラダイムの成立を宣言して、測定と開示の両面で研究の進展を促すことになりました。先生の会計測定論は、まさしくその時代の期待を担うフロント・ランナーであったのです。

私が先生のクラスに出席して直接ご指導をいただく機会を得たのは、会計測定をめぐる先生のご研究がひとつのピークに達したまさにこの時期、1967年でした。32歳の若さでカーネギーメロン大学の教授に迎えられたばかりの先生は、一時帰国されてカーネギーと交流協定のある青山学院大学で授業を担当されましたが、その折、先生は東京大学でも大学院の講義担当を委嘱され、会計専攻の院生だった私は10月から半年間のクラスに参加いたしました。テキストには、この年に刊行されたばかりの先生の著書 *Foundations* が使われました。会計学のセミナーにしては参加する院生の層も広く、専門の違う教官も加わって論じ合う刺激的な演習でした。東大紛争の前年ながら、忍び寄る学園荒廃の足音もまだ遠く、私にとってそれは天の与えた運命的な出会いでした。1年遅ければ、長く続いた紛争がせっかくの機会を台無しにしていたかもしれません。

当時、わが国の会計研究は、アメリカでの研究動向の紹介・論評と伝統的な制度論とが無秩序に交錯したまま、そこから理論や実証の本格的な分析が生まれる状況にはなかったように思います。情報という新しいキーワードも、複式簿記は生き残るのか、原価主義はどこへ行くのかといった、素朴な議論に埋もれてしまいました。本当に問われていたのは、なによりもこの分野における分析のマネーそのものを、経験科学に共通の方法で立て直すことでしたが、一部を除けばその自覚は希薄で、私どもが将来を賭けるに足る分野かどうか、はなはだ頼りない状況にありました。先生は複式記録や原価評価の前提を取引の因果的な連鎖でモデル化するとともに、前提を変えた世界をたとえばストックとフローの変数に加速度（限界的なフロー）を加えた斬新なアイディアで描き出し、理論の可能性を目の当たりに示されたのです。

先生はまた、演習のあとに長時間のオフィスアワーを設け、私たちが自由に訪れるのを待っていただきました。こちらはさすがに来る人の数は少なく、メンバーも固定していませんでした。私はこの時間帯にも毎回のよう押しかけて、しばしば遅くまでお話を聞かせていただきました。もちろん私も生意気盛り、授業の途中でもあとでも突っかかることはたびたびありましたが、先生も若く、攻撃は正面から撥ねつけられました。お話をさえぎって反論し、"Let me finish!" と大きな声で叱られたこともありました。そのときは納得できないまま、何年か経って影響を受けたことも少なくありません。毎週のように胸を借りたあの半年間の得がたい体験は、その後の私の学者人生を大きく方向づけることになりましたが、それはもう私個人の話になってしまいます。

カーネギーに奉職されてからの先生は、1987年に University Professor の称号を受けられ、学外では82～83年にアメリカ会計学会会長、89年にはオハイオ州立大学の会計殿堂（Accounting Hall of Fame）に顕彰されるなど、まことに華々しい足跡を残しておられます。75年の *Theory of Accounting Measurement* (AAA; 『会計測定の理論』, 東洋経済新報社) をはじめ休むことのない数多くの著書や論文は、専門分野をはるかに超えて新しい概念を発掘し、ご自身の使い道に合った解釈をそれに付与しながら、人の考えつかない着想で解くべき

問題を定式化する創造性に満ちたものでした。院生時代、先生の印象を問われて私は、ひとことと言えば concept builder だと思うと評したことがありました。新語を作る人はいくらでもいますが、物事の核心をとらえる概念を考え出して分析に活かせる人は少数です。40年に近い歳月を経ても、私は同じひとことで先生の本質を表したいと思います。

先生は古稀をお迎えになりましたが、「人生七十古来稀なり」という杜甫の句は、「酒債尋常行く処あり」という慨嘆に続きます。どこへ行っても飲み屋のツケばかり、でもどうせ人生七十、まあいいではないかということでしょう。ご承知のように杜甫の晩年は、苦舟一艘を川岸につなぎ、「孤舟ひとえに繋ぐ故園の心」を詠い続けた浪々の旅でした。それと違って先生は外でお酒を召し上がることもなく、ひたすら書斎で思索を深めておられることと思います。昔の七十歳も、今では長くなった人生の通過点にすぎません。ダンテの『神曲』に、「燈をあとに提げて夜行く人」という師への賛辞（浄罪界第22歌）が出てきます。自分自身よりも、後に続く者のために暗い道を照らすリーダーです。優れた concept builder である井尻先生には、まさしくこの役割が期待されています。これからも先生が奥様とお揃いでご健勝に毎日をお過ごしになり、斯界のためにも私ども後進のためにも、変わらぬご活躍を続けられるようお祈りする次第です。

（2005年6月26日、古稀記念レクチャーでの挨拶より）

会計と物理と漢詩の優雅

—ミニ自叙伝—

井尻雄士（カーネギーメロン大学教授）

1

古希記念ということで、斎藤静樹先生と石川純治先生がパーティーを駒澤大学の構内で開いて下さったのは平成17年の6月26日（日）だった。できるだけ小規模でお願いしていたが、50人ほどかけつけてくださって、とても楽しいひとときをすごした。そのさい懇親会のまえに1時間ほど最近の論文の紹介をさせてもらった。「量子情報と会計情報」(Quantum Information and Accounting Information) という題で英文の原稿を4人の教授と共同で書き始めていたが、その内容を簡単に説明した。その講演のDVDもできてきたが、参加された皆さん方に活字になったものを配布するので、なにか会計学と物理学との関係などについて書いたものをというご意向でこの小文を書くことになった。

しかし会計学は本職なので書くことができるが、物理学はなまかじりでとても学として一貫した話のできるものではない。ただ自分の体験してきたところはある程度、正確に説明できるのではと思うので、その範囲の体験談かつその方面でのミニ自叙伝というところでご了承いただきたい。

2

私は小学校にはいったそうそうから親のすすめで放課後そろばん塾に毎日かよったが、性にあっていたのかとくに暗算が大好きになった。勝ち抜き戦などがあって上級生をまかすたびに上達した。いまから考えるとこれが数学が好きになる基盤になっていたようである。それが14才になって突然、複式簿記というものに

興味をもちはじめた。発端は小さな町でパンの製造小売商をやっていた父の雇っていた会計士が気に入らず、どうだやってみないか、ということでもかさされたからである。これまでの帳簿をしらべてまねをすところからはじまったが、得意のそろばんが実務に役に立つということですっかりやみつきになった。

高校にはいってからもあいかわらず数学がすきで、どんどんすすんでいったが、物理はどういうわけかそれほど熱がわかかなかった。演算などはうまくできるのに応用問題が不得手でまるで外国語をよんでいるようだった。それに比べると高校で2年間ならった漢文は漢詩や名文をまる暗記して歌をうたうようになりかえしていた。半世紀たったいまも、ぼろぼろになった当時の教科書2冊を楽しんでいる。漢文も外国語、物理も外国語ならどうして一方は大好きで他方はだめなのかわからなかった。それでも大学にはいってからも力学の本など勝手に読みとばして数をこなしてくると少しは自信がついてきた。

3

物理を本当に面白いと思うようになったのはカーネギーメロン大学の博士課程にはいってからである。とくにノーベル経済学賞受賞者の故ハーバート・サイモン (Herbert Simon) 教授の授業をとってからである。そのなかに数理社会科学 (Mathematical Social Science) という科目があってこれには物理の問題がたくさんでてきた。物理も社会科学も方法論では差がないということに感銘を受けた。コースの終わりに論文が要求されているので、コースのなかで紹介された企業のサイズ分布の問題をテーマにした。教授が生物学のジャーナル、バイオメトリカ *Biometrika* に出版された論文の前提をすこしかえて、たとえば割引率を入れると分布にどういう影響があるかなどをしらべた。その後、教授との共同論文がいくつかできたので、それらをもとに1977年には共著の本を出版させてもらった。

そのころたまたまボーズ・アインシュタイン統計 (Bose-Einstein statistics) というめずらしいものであった。完全なコインを2つなげると、表表が4分

の1, 表裏が2分の1, 裏裏が4分の1確率でであるのは当然のようにおもわれるが, ボーズ・アインシュタイン統計ではそのおのおのが3分の1づつになるというのである。ところがこれが統計力学では粒子によってこの分布をするものが実際にみられるというのである。いろいろしらべてみても, そうなるものがあるというだけで, どうして(why?)ということの説明しているものはみあたらなかった。きっとどこかに説明があるのは当然だが, 重複してもいいから自分で理由を考えてみようと思った。

いろいろ思考錯誤のすえにつぎのような説明をおもいついた。いま間口の同じ(たとえば1メートルの)店Aと店Bが2つとなりあわせにあって同じ品を同じねだんでうっているので, AもBも2分の1づつの確率で客がくるとする。コインをなげる例では2つのコインが同時に独立になげられたが, ここでは2人の客が1人づつ, たとえばまず客Pが店Aに2分の1の確率ではいるとする。すると店Aの間口が1メートル広くなり, 次の客をひきつける確率は2倍になるとする。つまり間口はいつもひきつけた客の数に1を足したものをメートルで表示する。したがってそのあとの客Qは店Aにはいる確率が3分の2, 店Bにはいる確率が3分の1となる。すると店Aが客PとQの2人をひきつける確率は客Pの $1/2$ と客Qの $2/3$ を掛け合わせた $1/3$ となる。おなじことが店Bについてもいえて $1/3$ となりしたがって2人の客が店Aと店Bにひとりづつはいる確率も $1/3$ となるのである。

つまりサイズが大きくなればなるほど, 次の客をひきつける力がつよくなる, いわば感染的(contagious)なダイナミズムが粒子の分布に潜在していると解釈できる。こう解ってくるとますます物理の魅力にひかれてしまった。最近の物理の分野には量子力学のように予測はできるがその説明がつかないものがどんどんでてくるようになってきた。それでも説明がほしいというのは, たんに科学者の探究心のみならず, 説明があるとその応用範囲が広くなるという実利的なプラスがあるのだ。納得できる説明, つまり感染的なダイナミズムが原因だとわかると, ほかの分野へ応用できる範囲がぐっとひろくなり, 学際的(interdisciplinary)な知識の移転が楽になる。その結果, 企業のサイズの分布や都

市人口の分布，その他あらゆる感染的な事象も粒子間の相互作用に共通するものがあると解釈できるのである。

4

サイズ分布で物理のありがたさを知ったので，そのいきおいで大学生のころからの難問に取り組みたいと思った。それは複式簿記を論理的に「三式簿記」に拡張することはできないかという問題である。これは小学生時代に疎開先でお世話になった日蓮宗のご法師さんが京都にでてこられたさい，その友人で京都在住の画家と3人で清水寺のちかくのある瀬戸物屋で茶碗に願望の寄せ書きをして窯で焼いてもらったことがある。それを半世紀以上もたったいまでも，大事にもっている。というのはそのよせがきに書いた当時の願望が「二より三へ」というものだったからである。その底に「平安光抱」とかいてあるのは，窯元の（実にいい）名前だ。そのそばに画家がぼつりと小さな柿を画いて願望の証人になってくれた。

三式簿記の探求ではずいぶん回り道をした。まずスタンフォード大学で4年教鞭をとったがそのころは，三式簿記をするためには，論理そのものを正否の二元から正否とその中間の三元に変えなければならないのではと思います，多値論理（multi-valued logic）や確率論理（probabilistic logic）を勉強した。それにつれて当時ポーランドからスタンフォードに客員教授できていたメタ数学（meta-mathematics）の教授のコースを一年間聴講させてもらった。これなどはほかの面でおおいにプラスになったが，それに基づいて三式簿記の展開というわけにはいかなかった。その後カーネギーにもどってから論理のコースの聴講は続けたが三式簿記の展開に役立つものはでなかった。その当時アメリカ会計学会の会長に就任することになったので，旅行が多くなり三式簿記の探求もしばらくはあきらめなければならぬと思ったので，就任までにこれまでのものをもとにモノグラフにまとめ学会から出版してもらった。

ともかく複式から三式にどう変わるかをするためには，まず単式から複式に

どう変わったかをはっきりと確認することが大事であると自分にいきかせて何度も検討した。単式の時代にも貸借対照表はながらく存在していた。したがって複式になって充実したのは名目勘定であり損益計算書であるのははっきりしている。そこで損益計算書と貸借対照表とくらべてその延長にあるものはなにかとかがえた。ここまで絞ってくると答えはあきらかで、損益計算書は過去の業績をあらわし貸借対照表は決算日現在の現状をしめしている。それならその延長にくるものは将来の予測をもとにした計算書となるので、これはとりもなをさず、予算計算書となる。これで過去・現在・未来の三元が連続して表示されるのでこれに勝る会計三元論はまずないだろうと思われた。

しかしそのばけのかわはずぐはがれた。単式から複式に移ったときは損益計算書の名目勘定が収益・費用の詳細を取り扱うため実に数多い勘定科目が発生した。それにくらべると、予算計算書は損益計算書と期間がちがうだけで、まったくその様式は同じものであることに気がついた。いわば平面図でいうと現在をあらわす縦軸の左半分が複式であったものに、たんにその右半分をつぎたしたにすぎないことが解ったのである。実用面ではこの三元の報告書は歓迎されるかもしれないのでモノグラフには「時制的複式簿記」として紹介したが、理論的には新鮮なものがないのは残念だった。そこでもう一度振り出しにもどって考えなおしてみた。

名目勘定として複式簿記にはいつてきたものは、実質勘定の変動の理由を説明する役割をはたしている。説明がなくとも変動値のタイムシリーズで予測をすることはできるが、うえにもものべたように理由がわかるとそれにもとづいた変動値のこまかい分類ができ、きめこまかな予測ができることはたしかである。単式簿記とくらべて、複式簿記は名目勘定による原因・結果の説明ができるというのがそこからうまれるデータの基本的な違いである。それなら名目勘定の変動を説明するものがあれば、これは説明の説明として三式簿記の基本に組み入れられないかとかがえてみた。当期の利益が前期にくらべてどのようにしてあがったのか、あるいはさがったのかはどの企業をとってもそのトップマネジメントが一番知りたいところのようである。そこで問題は損益計算書が一期

間のフローをあらわすものではなく貸借対照表のように一時点でのストックになってくれればべりなのだがな、とおもっているうちにふと損益計算書を微分したものをかながえてみた。

このへんから、大学時代に力学をかじったのがプラスになりはじめたのである。もちろん細かいところはほとんどわすれたが、基本的なところはぼんやりと残っていてどこをさがせば必要なものがでるかはずぐわかった。その後しばらく夏休みを返上したかこうで力学の計算問題をばりばり解いて自信をつけた。運動量と力積が同じ測定単位ではかられており、運動量の変動を力積が説明しているのもありがたかった。物理の用語からすこしはなれるが、計算書のなまえは「利速計算書」(momentum statement)と「作速計算書」(impulse statement)とした。この2つはまるで貸借対照表と損益計算書とおなじような関係になっているのがわかった。

さらに測定単位は円ではなく円/月、つまり月あたり何円の数で利益があがっているか、それが一時点でのストックとして貸借対照表と同じように企業の資産とみるのである。円でなく円/月で会計の測定単位になりうることがわかったのが、ひとつの分岐点になった。しかも従来の業績評価のように前任者の作った新製品の売れ行きの惰性にのっかって、利益があがりボーナスもでるというのではない。ニュートン力学の法則にあるのをとりいれて、利益は一度速度がでるとあとはほっておいても直線等速運動をするというのが、業績測定の基本線になり、それからの誤差をまさつと同じように考えて処理できることにきがついた。したがって期首の利速(モメンタム)と期末のそれとに変化がなければ、その間に利益がどんどん上がっていても、業績はゼロという厳しいものになることがわかった。

よく利速会計や三式簿記の実用化はどうなっているのか、実用化されなければお前のやったことは何も意味がないということを暗黙のうちにいうひとがいるが、そういうのは相手にしないことにしている。アリストテレス以来、ものが動くのはいつも力をくわえているからで、力を抜くとすぐに止まるのは当然とされていた。これがいまある会計での業績の考えかたで、だから前任者のつ

くった利速にのっかってなにもしないでも利益があがりボーナスがもらえるのが現状である。ニュートン力学はそれをくつがえしたのだが、同じことが利速会計でおこなわれ、こういう厳しい業績評価がはじまると困る人がたくさんいるので、おいそれと実用化するのはむずかしい。しかし実用化のいかんにかかわらず、物理の概念をかりて会計でのまったくあたらしい業績評価の理念ができたのは、それだけでたいへんうれしかった。

5

さてボーズ・アインシュタイン統計とサイズ分布の問題、および三式簿記と力学の問題を検討したが、ここで3つ目に量子力学と会計の問題をとりあげたい。量子力学を面白いと思いはじめてからもう十数年になる。1987年にカーネギーメロン大学の大学直属教授（University Professor）に昇進されたので、他の学部の教授との会議の機会がふえ、科学における最新の問題などで教わる場所が多くなった。その会議のひとつにディクソン科学賞というのがあって、毎年一度、とくに重要な発明・発見をしたアメリカの科学者を一人選んで相当な賞金をディクソン基金からだし、同時に大学で記念講演をしてもらってきた。それが1999年には量子コンピュータのアルゴリズムの開発におおきな貢献をしたベル研究所のピーター・ショアに受賞がきまりその記念講演とそのあとのセミナーにでた。それ以来急速にやみつきになり、量子力学とくに量子情報の関連の本や論文をいろいろ読んでみた。

さいわいにも次女の柚美とそのハズバンドのスティーブン・フィツジェラルドがともにコーネル大学の物理学部で博士号をとり、オバリン大学（町田市の桜美林大学はその提携校）の物理学部で教鞭をとりはじめてからもう8年目になるが、カーネギーからオバリンまで自動車で3時間たらずなので週末によく行き来をしてきた。スティーブンは量子力学のコースを教えており、柚美もその方面に近い研究をしているので機会があるごとに量子情報の本などをとどけてもらった。オバリンの同僚で量子力学の本を出版した教授がいてその本ももらっ

だが、これはたいへんプラスになった。そのうちスティーブンからビジネスとの関連などで3人の共同論文ができればいいかと半分冗談のような話があって考えてみようということになった。一年半ほどまえのことである。

ところでノーベル物理学賞受賞者の故リチャード・ファインマンがほぼ半世紀まえにコーネル大学で7回の講演をやったが、そのビデオをもっている教授がいて、週1回のシリーズでカーネギーの大講堂で公開してくれた。そのころ私の授業の助手（teaching assistant）をしていた博士課程の中国の学生、ハイジン・リンがそれまで数学や物理がすきでいろいろ情報を交換していたが、彼女をさそって7回の試写に出席した。そうするとどこでさがしてきたのか、この講義のビデオから筆記して出版された本をもってきたのにおどろいた。おかげでそれ以降の講義はまえもって準備ができてたいへんたすかった。量子情報の本や論文も交換しあって検討した。それまでに共同論文が2つあったが、いづれも量子情報とは関連がなくいつかは関連させたいと思っていた。

ハイジンは一年半まえに博士課程を卒業したが、フロリダ大学の会計の教授でアメリカ会計学会の前会長であるジョール・デムスキーに引っ張られてフロリダ大学の助教授になった。彼女は大学のデムスキー・ファンで、彼からのオファーがでると即日ほかからのオファーを全部ことわった。このことは私にもたいへんありがたかった。というのはジョールは会計の分野では情報理論のおおきな貢献者であって、2002年には *Accounting Theory: An Information Content Perspective* という本をジョン・クリステンセンと共著で出版している（早稲田大会計教授陣の翻訳で日本語版がもうすぐ出るそうである）。そこで量子情報と会計情報というテーマで論文を考えているが参加しないかということ、昨年夏ハイジンがフロリダについたすぐあとにジョールにきいてもらったら、すぐ「もちろん賛成」という返事がかえてきた。これで「5人の侍」(?) がそろったとおもった。

ところがこれからがなかなかすまなかった。というのは会計のコースは必修が多くそれらがすべて8月末からいっせいはじまるので、秋の学期とくに9-10月は一年でも一番忙しい時期になっている。しかしハイジンのほうは、

秋の学期に授業がなく（そのかわり春の学期には700人の学生を大講堂にいれ15人の演習の助手を使って講義をするそうだ）量子情報の本をよんでは、その要約をつくって送ってくれたが、あとでこれが大いにやくだった。それでまけないようにこちらもすこしづつ書き始めた。しかし楽しみにしていた春の学期にはいってからも、講義のほうに相当時間がとられた。というのは学生のほうからの依頼があって「国際会計基準」のコースを新しく開設して欲しいというのである。私のほかにやるひとがないので、自分の勉強にもなるからと思ってひきうけたが、これに予想以上の時間がとられた。なんだかんだで、ようやく5人のあいだで原稿が回転するようになったのは卒業式がおわった5月下旬であった。

そのかわりはじまったら一気に草稿ができあがった。6月26日の駒澤大学での古希記念会ではこの英文の一部をもとに日本語で解説をした。そのあと8月15日にアトランタのエモリー大学で英文の原稿をくばって説明した。いづれもいい反応をいただいたようである。8月27日にこれまで毎年カーネギーで続けてきた第6回の会計コンファレンスで発表することにした。そのための原稿を7月30日で締め切りコンファレンスがおわるまで凍結した。コンファレンスの会場で違ったバージョンがでまわってはこまるからだ。そこでの原稿を一部、恩師のウィリアム・クーパー教授にお送りした。一週間もたたないうちにお手紙をいただいて、これはブロックバスターだとありがたい評価をいただいた。しかし学際的な論文なので残念ながら専門化しすぎた通常の学術誌ではどこも出版してくれないだろうといわれた。

8月27日のカーネギー会計コンファレンスでは、共著者5人が全員あつまって発表した。これは予想以上の好評でわれわれ5人ともとてもうれしく思った。心配していた出版社のほうも、*Journal of Accounting and Public Policy* というメリーランド大学で出版されている学術誌が、学際的論文もすこしはとりあつかっているようなのでここに提出した。そうすると幸いにも数週間でレフェリーの批評が届き、重要な文献が落ちているなどの協力的なコメントがあったのち、これはGemであるとの総評をうけたので、エディターから即座に受理された。クーパー教授の警告があって心配していただけに、われわれの喜びは

おおきかった。2006年の春の号に出版が予定されている。

6

それではここで漢詩のことについて簡単にのべて終わりの言葉にしたい。はじめに高校の漢文のことをのべたが、どうして漢文がこれほど好きになったのかわからない。きくところによると、斎藤静樹先生のご祖父様が漢学者だったそうで、ちいさいころから漢文や漢詩を教えてもらったとのこと。たいへんうらやましく思っている。

すきになった理由は、「優雅，エレガンス」という言葉にあるように洗練された簡潔さというものがあるからではないかと思う。その優雅なところは会計の複式簿記にもみられ、物理の公式にもみられ、漢詩の対句にもみられる。しかしその優雅というものは、決してほっておいても勝手にできるものではない。むしろ推敲に推敲をかさねてできあがるものなのである。

斎藤先生のご招待で2003年夏、企業会計基準委員会での講演の機会をえたさい、古詩「桃夭」をそのフレームワークにかりたことは、斎藤先生のご挨拶にもあがっているとおりである。これはこういう制約があると書き流しをしなくなるからである。型にはめるために何度もかきなをしをやっているうちに、しだいに洗練された優雅なものがうまれる。したがって推敲さえできればフレームワークはなんでもいいはずであるが、同じことなら高校のころから何度も読み返した古詩「桃夭」にあやかりたいと思った。これは物理の概念や公式にあやかるのと、まったく差異はないのである。

それにしてもビジネスの非常に卑近なものを取りあつかう会計において優雅なものをみつけるというのはたいへん楽しいことである。数学者アーサー・ケイリーが複式簿記をたたえて「絶対に完全」(absolutely perfect)といったのも美的感覚を重要視するからである。こういうわけで会計と物理と漢詩をつなぐものは優雅ではないかと思うので、これをこの小文のタイトルにいれ、おわりの言葉にしつつ、古希記念会のお礼をもうしあげるしだいなのである。

科学としての会計 —井尻先生の学問性—

石川純治（駒澤大学教授）

アイジリ先生との出会い—会計と数学の融合— 私が初めて井尻先生のお名前を知ったのは、実は、井尻先生ではなく「アイジリ先生」でした。昭和49年（1974年）、もう30年も前になりますが、大阪梅田の会計士補の実務補修所で講師の先生からお聞きしたのが最初でした。このアイジリ教授にまつわるエピソードはたいへん興味深いものがありますが、ここでは残念ながらそれに触れる時間的余裕はありません（私のホームページの「会計研究のアンビバレンス」にでています）。

さっそく梅田の書店で、『計数管理の基礎』（岩波書店、1970年）を見つけ、むさぼるように読んだのが井尻作品との最初の出会いです。これは井尻先生の Ph.D 論文 (*Management Goals and Accounting for Control*) の日本語版ですが、特に会計と数学の融合にあっと驚いたことを今でもよく覚えています。

「会計測定の基礎」—異色の特賞— その後、いわば決定的な出会いとなる作品を知ることになります。『会計測定の基礎』（東洋経済新報社、1968年）です。これは、皆様ご承知のように1968年の日経図書文化賞の特別賞を受賞された著作です。この機会に、その当時（昭和43年11月3日）の新聞の切り抜きをもってまいりました。

当時の審査委員であった中西寅雄は、特賞ですので別格あつかいになっていますが、「科学としての会計」という大見出しの論評のなかで、「科学としての会計学は著者によってはじめて基礎づけられたといっても過言ではないであろう」と絶賛しています。ちなみに、私はここでいう「科学」、そして会計の「科学性」なるものの内容を、その後の研究の1つの問題意識においてまいりました。

なものを扱いながら会計の中身の深さを表現したいと思っていたのである」と述べられています。私は、この会計の「卑近さ」（世俗さ）と会計の「深さ」という、一見相容れそうもない関連に触れられておられる点が大変重要なところだと思っています。というのは、先生の学問性を語る時、それは1つの重要な特徴点だと思っているからです。

「ファウスト」の一節－「行学一如」－ この特賞の作品だけをみられると、井尻先生は純理論的な学者というイメージがあるかもしれませんが、実はそうではありません。それは、私のホームページに掲載している「井尻先生と語る」（1989年、於カーネギーメロン大学）にもでています。少しだけ、紹介したいと思います。

私が先生の学問的影響のポートフォリオについておたずねしたとき、先生のお答えのなかに次のようなところができます。「…ポートフォリオに2つあここがれがある。これでたいていカバーできる。ファウストのなかで非常に好きな言葉があっていつもよく思い出すが、『かれは天上のいちばん美しい星を取ろうとしているかと思うと、大地のもっとも深いたのしみをも極めたいと考えています』という一節がある。…」先生はこのゲーテの「ファウスト」の一節（天上の序曲）がたいへんお好きだと言われていますが、そこでの「天上の美しい星」とは学問的な面であり、また「地上の深いたのしみ」とは実践的な面であります。井尻先生は、この2つのあここがれをわりあい早い時期にポートフォリオのなかに入れてくれた環境が非常にありがたかったと述懐されておられます。

実は、駒澤大学の建学の理念は「行学一如」です。「行」とは実践、「学」とは学問です。それが「一如」、つまり2つであって1つ。まさに、井尻先生はその理念の体現者であります。おちがついたようですので、私の挨拶はこれで終わりたいと思います。

（2005年6月26日、古稀お祝いパーティーでの挨拶より）

〈あとがき〉

記念レクチャーのあと、お祝いのパーティーが開かれた。最初に田中章義先生（東京経済大学名誉教授）に乾杯の音頭をとっていただき、宴会が盛り上がったところで中野勲先生（神戸大学名誉教授）と伊丹敬之先生（一橋大学教授）からユーモアあふれるお話を頂戴した。そして、パーティーのお開きの前に、記念品の贈呈が行われた。実は、この記念品の選定では、時計や万年筆といったありきたりのものはやめようというポリシーだけは決めていたが、いざ何をとなるとけっこう苦労した。井尻先生は漢詩がお好きなのを知っていたので、漢詩の本はすんなり決まり、その選定には斎藤先生があたられた。まだ予算が十分あるので、もう1つの品物を何にするか、これには大いに苦労した。結局、独断であるが意外と思われるものを選んだ。

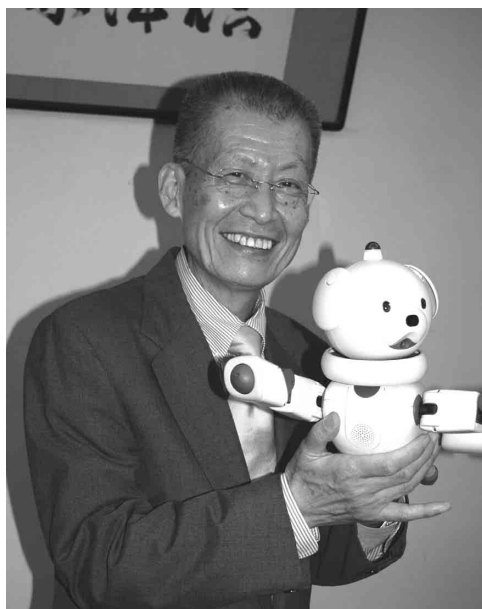
パーティーでは、それを布袋につつんで片隅に隠しておいた。さて、それを披露する段になったとき、いきなり袋をとって見せるのも芸がないので、ご招待した先生方をまえに「当てっこゲーム」となった。「カーネゲームロンといえば、…これ」は、かなりのヒントになったと思う。それが何であるか、パーティーにでられなかった先生方には記念の写真をご覧いただきたい。ちなみに、その名前は、井尻先生と待ち合わせ場所に使った渋谷のハチ公前にちなんで「ハチ」と名付けられた（実は、わが愛犬の名前もハチ）。

なお、後日談になるが、この品物は荷物になるので一端自宅に持って帰る予定だったが（後日、付属品とともにアメリカに郵送する予定だった）、井尻先生はよほど気に入ったか、そのまま宿舎に持って帰られた。さらに翌日、先生からお電話があり、バッテリーなど付属品一式をこれから取りに来られるという。これには驚いた。お忙しい先生だからわざわざ自宅まではと思い、田園都市線のあざみ野駅のプラットホームで待ち合わせすることにした。付属品一式を多少の解説をまじえてお渡しすると、先生はそれを大事そうにかかえてにこやかに渋谷にUターンされた。パーティーでは井尻先生に「くれぐれも分解しないように！」とお願いしたが、それがあながち冗談でないことがおわかりだろう。

ともかくも宿舎で「ハチ」といっしょに遊んでおられる姿を想像しながら、

会計と物理と漢詩－井尻雄士先生古稀記念－（井尻・斎藤・石川）

「これが井尻先生だ！」とあらためて思った。と同時に、遠ざかる電車を見送りながら、これで肩の荷がすべておりたと実感した。なお、その後の先生からのメールによれば、アメリカに渡ったハチは分解されることもなくすこぶる元気で、お孫さんとのピクニックにもいつもいっしょとのことである。幸せなるかなハチ、である。（石川）



*「祝う会」事務局より

井尻先生からくれぐれも派手な会にしないようにとのご希望にそって、案内状の送付は限定せざるをえませんでした。本来なら案内状を差し上げなければならない先生方がおられるかと存じますが、この点ご理解いただければ幸いです。また、お祝いにはびったりの日本庭園が美しい「国際センター」（旧三越迎賓館、深沢キャンパス）が工事中で使用できず、狭い会場でいろいろご不便をおかけしました。事務的なことでいろいろご迷惑をおかけした点とあわせて、ご容赦いただければ幸いです。（石川・小栗）